

日本新聞製作技術懇話会
広報委員会編集

編集人 桑江 暢也
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8階 (〒100-0011)

電話 (03) 3503-3829

FAX (03) 3503-3828

<http://www.conpt.jp>

CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.40 No.1
2016.1.1
(通巻 235号)

日本新聞製作技術懇話会
会報 (隔月刊)
(禁転載)



目次

年頭のご挨拶	日本新聞製作技術懇話会 会長	上坂 義明	3
	日本新聞協会技術委員会 委員長	三宅 直人	4
新聞協会賞「技術部門」を受賞して 新聞用完全無処理 CTP プレートの開発と実用化 ～環境対応型 CTP プレートの最終形を目指して～	産経新聞東京本社 制作局技術二部	坂本 剛志	5
楽事万歳	産経新聞大阪本社 制作局印刷担当部長	大平 清隆	7
	東洋インキ(株) インキ営業本部新聞インキ営業部 第2課課長	立川 雅人	8
わが職場あれこれ	熊本日日新聞社 印刷局技術管理部長	山下 修	9
	(株)日経首都圏印刷 千葉工場製作部長	小川 圭一	9
新聞製作技術の軌跡(第7回)	朝日新聞社 OB	立花 敏明	10
新旧マネージャーあいさつ			16
第41回年末全体会議開く			17
3氏 感謝の集い			17
会員名簿			18

●表紙写真提供：富士フィルムグローバルグラフィックシステムズ(株)・富士山

●表紙製版：(株)デイリースポーツプレスセンター

●組版・印刷：(株)デイリースポーツプレスセンター

年頭のご挨拶

裾野の広い提言活動めざす

日本新聞製作技術懇話会 (CONPT-JAPAN)
会長

上坂 義明



謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

昨年は、1月のイスラム過激派組織によるフランスの諷刺週刊紙シャルリー・エブド本社への襲撃事件に始まり、11月にはパリ中心部の劇場やレストラン、近郊のスタジアムなどを狙った乱射や自爆事件が発生しました。宗教や政治思想の違いが生み出す軋轢は、21世紀の世界に大きな緊張をもたらしています。

国内では9月に安全保障関連法案が成立、10月にはマイナンバー制度が始まりました。新聞界に大きく関わる案件としては消費税の問題があります。新聞への軽減税率適用は、活字文化の維持だけでなく、新聞製作技術にも良い影響が及ぶものと期待しています。

*

さて、欧米の新聞界では広告支出が紙の新聞から離れ、ビジネス・モデルは大きく崩れてきています。販売部数も一本調子で減少に向かっています。さらに、移行した先のデジタル分野での収入増では紙の損失を補えないという認識が一般的になっているようです。

その一方では、オンライン課金に成功を収める事例が現れ、ネイティブ・アドと呼ばれる新しいタイプの広告ビジネス・モデルも模索されています。ニューズレターやイベント・ビジネスに活路を見出そうとしている新聞社もあるようです。こうした、柔軟でしたたかな経営努力によって、メディア業界の退潮に

歯止めがかかることを期待しています。

*

欧米の新聞事情を「他山の石」と捉えた場合、新聞界とベンダー間の会話が今まで以上に重要になってきているのではないかと考えます。新聞を守り維持する立ち位置から新聞メディアの強化に視点を切替え、建設的な情報交換を行う場が欲しいところです。CONPT会員各社の業種が多岐に亘っている強みを生かして、裾野の広い提言活動を目指したいと考えます。一昨年に始まった「CONPT技術研究会」は、個々の会員社の利害を超えて新聞界に最新情報をお届けする企画です。是非継続してゆきたいと考えますので、皆様のご協力をお願い申し上げます。

*

恒例のCONPT-TOURも第41回。今年はデュッセルドルフで開催されるdrupa 2016の視察を主目的にしたツアーを6月に派遣する予定です。前回話題となったデジタル・プリンターが、更に進化した製品となって一堂に会するものと期待しています。その他、プリンテッド・エレクトロニクスなどの分野でも画期的な進展が見られるでしょう。より多くの皆様のご参加をお待ちしています。

また、ウィーンで10月10日(月)～12日(水)に開催のWorld Publishing Expoにもツアーを派遣する予定です。新聞に特化したこの機材展と関連セミナーでは、新聞製作の将来展望と同時にオンラインビジネスのヒントも掴めるものと考えます。初夏の頃には訪問先や日程をご案内しますので、どうぞご期待ください。

今年もCONPTのさまざまな活動に、ご理解とご協力をお願いいたします。

二人三脚で開く未来

日本新聞協会技術委員会
委員長

三宅 直人



あけましておめでとうございます。私が新聞協会技術委員長をお引き受けて半年以上が経ちました。勤務先(毎日新聞社)の6月異動で技術本部長を拝命し、連動する形で協会技術委員長や第22回新聞製作技術展(JANPS2015)の実行委員長、新聞協会賞「技術部門」の選考分科会委員長という重要な役回りも務めさせていただいた次第です。

*

文学部卒業の純粋文系人間。記者職出身の私にとって、技術の仕事は全てが珍しく、新鮮な体験の連続でした。JANPSをはじめ、ベンダー各社の展示会や輪転機メーカーの工場など、機会を設けては、技術最前線の現場をこの目で見るように努めてきました。

感じるのは、私が入社した1981年からの30年あまりの間に、新聞製作をめぐる環境が激変したということ。現代の新聞社が明治時代に誕生して以降、空前の技術革新が立て続けに起こったということです。

私が新人記者の時代、携帯電話やインターネットは、影も形もありませんでした。写真はフィルムカメラです。支局の暗室で現像し、ピーコ、ピーコと音のするドラム式電送機で本社に送信。原稿は手書きして、パンチャーさんが入力機に打ち込んでいました。

本社はと言うと、鉛の活字で組み版し、印刷は凸版輪転機。カラー紙面はまずなく、モノクロ印刷のオンパレードだったのです。

今や取材記者が現場から記事や写真、動画まで送信し、本社から組み上げた紙面のゲラを打ち返してもらうことも可能です。整理部では、編集者がスポーツ紙のような凝った紙面も1人で組み上げ、工場では4×1のオフセット輪転機が鮮やかなカラー紙面を高速で印刷する。電子媒体でも広く世界に向けて発信される。いや、時代は変わりました。

現場で変化を体験してきた私が思うのは、こうした大変革は、新聞社とメーカー各社の二人三脚があったからこそ達成できた、ということです。新聞社があれこれ無理難題を出し、メーカーがそれに応じて新製品を開発する。新聞社がユーザーとして使い込む中で、不備を見つけ改良点を提言する。そんなフィードバックがありました。

*

最近、ある電機メーカーの展示施設に赴いて、日本初のワープロの実物機を見ました。聞けば、私の勤務先の技術者がメーカーに対し「記者も原稿が入力できるような機械を作れないか」と注文。メーカーが試行錯誤の末に開発したそうです。電気製品というより、大型の事務机そのものとも言うべき巨大なワープロを見ながら、新聞社とメーカーの丁々発止に思いを馳せたものです。

現代は、紙と電子が融合する時代です。新聞製作をめぐる状況は、さらに変わっていくでしょう。30年後はおろか、10年後の絵姿すら想像することは困難です。

でも、新聞社とメーカー各社の二人三脚が続く限り、新たな時代を切り開いていくことは可能です。未来の新聞を作っていくために、各社の皆様のご協力を切にお願いして、新年のごあいさつといたします。

新聞協会賞「技術部門」を受賞して

新聞用完全無処理CTPプレートの開発と実用化 ～環境対応型CTPプレートの最終形を目指して～

読売新聞東京本社 制作局技術二部

坂本 剛志

弊社の「新聞用完全無処理CTPプレートの開発と実用化」が、昨年10月15日に大阪で開催された第68回新聞大会において新聞協会賞・技術部門受賞で表彰された。社内外からの反響が想像以上に大きく、改めて賞の偉大さを実感している。協力していただいたすべての方に感謝申し上げます。



振り返ってみると、2015年は始まりから締めくくりまで完全無処理CTPプレート(以下、無処理版)どっぶりの1年だった。15年1月末に木場工場のCTP1台で完全実用化に成功し、5月に東京北工場のCTP1台でも運用を開始した。7月にはJANPS(新聞製作技術展)で無処理版の取り組みを発表し、9月には新聞協会賞・技術部門受賞決定の朗報をいただいた。その後も展開を進め、12月末現在は木場工場のCTP2台、東京北工場のCTP2台が無処理版ラインとして運用中で、今年も引き続き導入を進める計画だ。

*

無処理版は製版工程において現像処理が不要なため、現像廃液やガム廃液をゼロにすることができる。自動現像機(以下、自現機)が不要になり、煩わしいメンテナンスからも解放される。無処理版の実用化は環境負荷の低減に加えて、省力化と設備の簡素化を図ることができる。

無処理版は機上現像版とも呼ばれ、湿し水で支持体と非画線部の密着力を低下させ、イ

ンキの粘性(タック)で非画線部を脱膜して画像を形成する。脱膜されて遊離した非画線部は、刷り出しの損紙に付着して排出される。

*

商業印刷用の無処理版はすでに実用化されていたが、新聞印刷転用には以下のような課題があった。①耐刷力が足りない②版の画線部と非画線部のコントラストが低く、CTPのベンダー(折り曲げ機)ではトンボの読み取りが難しい③一般的な新聞輪転は刷版の幅よりも紙の幅が広いいため、刷版の端にインキが付着して「エッジ汚れ」が発生する。

これらの課題を克服し、実用化するにあたり、富士フィルム、富士フィルムグローバルグラフィックシステムズ(以下、FFGS)と開発段階から多面的な実技評価を通じて相互協働し、作り込みを行った。約1年をかけて3工場でテストを行い、輪転機やインキなど31通りの組み合わせで問題がないことを確認した。

*

初めての検証は14年3月に木場工場で行った。三菱重工製輪転機ダイヤモンドスター(高速18万機)で刷り出しの整面性や輪転機への影響についてテストや確認を重ねた。整面性については、一部で汚れ落ちの悪い現象が見られたが、輪転機の設定や消耗品の状態を確認、調整することで解決できた。その結果、印刷開始から80部前後になると着肉状況やインキ払い状況は有処理版と遜色なく、刷り出し損紙が増えないことを確認した。また輪転機の各種ローラー表面やつぼインキ、湿し水廃液などを分析したが、無処理版起因の物質は検出されなかった。

耐刷力は府中工場の三菱重工製4×1輪転機ダイヤモンドスピリット(14万機)でも検証を

行ったが、25.3万部を問題なく印刷できた。

画線部と非画線部のコントラストが低く、トンボが読み取りづらい問題は、ベンダー内のLED照明を調整することで読み取り可能にした。版の折り曲げ部の面版名情報も読み取りづらかったが、ベンダー入口にインクジェットプリンター（以下、IJP）を取り付け、版が搬送されている間に版上に面版名情報を印字することで視認性を補助した。

今回導入したIJPはコンティニュアス方式だが、より簡素化するため、メンテナンス不要のサーマル方式のカートリッジ式の検証も始めている。エッジ汚れについては、版の端に親水化処理を施すと改善することがわかった。

*

既存のCTPシステムに一部改造や機器の追加も行った。今回使用したCTPエンジンは、パナソニックシステムネットワークス製のGX-9700であったが、当初の仕様では無処理版の感光層の色と、版の間に挟まれる合い紙の色を識別することができなかった。そのため、カラーセンサーを交換して無処理版と合い紙の色を識別できるようにした。

自現機は不要だが、テスト期間中は有処理版に戻すことも考慮し、自現機のローラーを外して上部に簡易コンベヤーを搭載した。簡易コンベヤーは簡単に取り外せ、ローラーを戻して処理液を仕込めば、1時間以内に有処理版の運用に戻すことができる。

*

CTPが3台構成で、輪転機3セット、廃液削減装置を設置していない木場工場では、無処理版導入前の14年実績で現像処理廃液を約2.8トン排出していた。現在はCTP2台が無処理版を使用しているため、現像処理廃液は3分の1に減少している。

仮に読売新聞を印刷しているすべての印刷工場に無処理版を導入した場合、年間800トン前後の現像処理廃液を削減できる見込みで、これだけの廃液回収処理費用がゼロにな

ることを考えるとかなりのコストメリットだ。

導入した工場の担当者から一番喜ばれるのは、通常1か月に1回、1台あたり2～3人作業で3～4時間程度かけて行っていた自現機の清掃と液交換の作業負荷がなくなることだ。現像処理液の購入や自現機の予備品購入も少なくなり、コスト削減につながっている。

その他、「有処理版に比べて傷が付きにくく、版傷による輪転機停止が減った」との声も聞かれ、無処理版導入の効果は非常に大きいと感じている。

*

今後この無処理版が広く普及するためには4点の課題があると考えている。1点目は版の視認性を補助するためのIJPが必要な点である。版自体の視認性を向上させ、IJPを不要にしたいと考えている。2点目はエッジ汚れ対策で親水化処理を施した部分が描画できないことである。パノラマ印刷などにも対応できるように、描画範囲の拡大を目指している。3点目は、現状は無処理版の水版専用版がないことである。4点目は合い紙が必要な点だ。産業廃棄物を削減し、合い紙除去機能がないCTPエンジンでも使用できるように合い紙レス化を目標にしている。これらの課題解決に向けて検討を続けている。

*

現状、無処理版はIJPで視認性を補助する必要があるなど発展途上のプレートだが、導入を進めることで技術開発も活発になり、他の課題を含め克服できると思っている。今回の新聞協会賞受賞は、今後の課題解決や導入を進めるにあたり大変励みになり心強い。

廃液を一切排出しない無処理版は環境対応型CTPプレートの最終形であると考えており、今後の新聞製作の主流になりうることを確信している。当社の実用化が、他の新聞社の皆様の無処理版導入の一助となり、新聞業界全体に現像廃液ゼロへの取り組みが広がれば、何よりの喜びだ。

楽事万歳

自分の船を持つぞ

産経新聞大阪本社 制作局印刷担当部長

大平 清隆

私が釣りを始めたのは7年前。以前はゴルフを趣味にしていたのですが、妻の親戚が脱サラして舞鶴で釣り船を営業しているのを知り、妻と同僚と3人で、初めての船釣りに挑戦しました。

釣りの方法には、大きく分けてエサ(練り餌や生き餌)を使う方法とルアー(疑似餌)を使う方法の2つがあります。私達は、ルアーを使用するジギングという釣りに挑戦しました。餌釣りとは違い、ルアーを生きてるかの様に見せる「シャクリ」は体力勝負。慣れない船釣りで私の身体は「悲鳴」を上げています。帰宅後のお風呂の椅子の上でもユ〜ラユ〜ラ。でも釣れた喜びが大きく、行く度に釣りにどんどんハマってしまい、今では社の釣り好きを集め年2回釣り大会を開催しています。

*

2013年11月、快晴。日本海・舞鶴沖。

夕闇迫る午後4時過ぎ。釣れずに納竿の時間がせまり来る中、ほぼ諦めモードの私の竿がグリーンとしなるとのこと。

これは…「来たか」？ 大物の予感！

12人の印刷工場の仲間からは「根がかりか？ 網か？」とからかわれながら、ひたすら見えない海の中の魚とのやりとり。10分、20分。さすがに周りも静かになって見守る中、とうとう姿を現した。

「デカ〜！」 丸々した鯛。

船から降り計量すると11キロまでの計量器の針は振り切り、計量不能。船長の憶測ではおおよそ12〜13キロ。文句なしの優勝です。

これに気を良くした私はハイテンション。

次は、これを超える獲物をとる勇み、行く度にシャクっていますが今のところは撃沈。海



深く、本当に見えないものの相手なので奥が深いです。

*

同僚の義兄も大阪湾で釣り船を昨年開業したと聞き、瀬戸内の釣りも挑戦中で、明石沖方面へ。夏はタコ狙い、さすがにブランド蛸は美味しく、これで一杯呑むとお酒が進む進む。太刀魚も波止から釣るのと違って大きくて食べごたえたっぷりなのが釣れます。

今は地元の釣り好きの先輩と家族ぐるみで仲良くなり、いつも妻と先輩と3人で1年中、瀬戸内海や日本海、太平洋と釣りを楽しんでいます。

太平洋と言えば…カツオ釣りは最高でした。

13年10月、同僚や先輩らと、行けども行けども着かない妻の父の故郷、愛媛県南宇和郡愛南町へ。車を走らせること6時間超！！四国で一番遠いのでは？

妻の親父は大工なのに…。ここでも妻の親戚が釣り船を営業しています。

足摺岬に見送られながら沖へ2時間。「パヤオ」と言う人工漁礁で、黒潮の流れに乗ってやってくるカツオやマグロを狙います。カツオはジグ(疑似餌)を落とすと釣れる入れ食い状態。なんと今、和歌山でマグロより旨いと言われ養殖が始まっているスマと言う魚も釣れるオマケ付き。

一度目は往復とも車を走らせたのですが、体力的にも運転の限界に近く、二度目の帰りはフェリーを使いました。船内でゆっくりと呑む「酒の肴にカツオの造り」と、釣果を船

乗り場近くの公園で、仲間とワイワイ言いながら解体ショー。

そのまま、フェリーに持ち込み、たまたま隣に乗り合わせた人達にもカツオの造りをお裾分けしみんなで舌鼓。楽しい思い出です。

残念な事に、昨秋、船長の親戚が体調不良で閉船状態で、美味しいカツオはお預けです。早く新たな釣り船を見つけて「脂ののったカツオ釣りたいなあ～」と考えています。

夢は、記録に残る大物を釣ること。定年後は舞鶴に移り住み、自分の船を持ち大好きな釣りをしながら老後を過ごそうと、毎晩、妻との会話も弾んでいます。

温泉のすすめ

東洋インキ(株)
インキ営業本部 新聞インキ営業部
第2課課長

立川 雅人

「もう疲れたー。」そんなときは現実逃避をしに温泉に出発する。大地のぬくもりは、たとえ一時的にでも、疲れや悩みを忘れさせてくれる。現実は何も好転していなくても、じわじわ元気が湧いてくる。それが原動力となって、行き詰っていた事態に変化を起こせるかもしれない？

そんな期待を抱き、11月の終わりのよく晴れた日、栃木県塩ノ湯温泉を訪れた。

*

塩原は紅葉の頃はまさに絶景で現実逃避感が嫌でも高まる。塩原には11もの温泉があるがその中でも塩ノ湯は最も塩分濃度が高い温泉だそうで、以前から訪れてみたいと思っていた地であった。

塩原の温泉街をちょっと離れて、深い森の中へ向かうと嘘みたいに静寂が訪れ、やがて切り立った山肌を鹿股川に挟まれたわずかな平地によりそうように2軒の旅館が並んで建っているのが目に入る。

建物は崖っぷちに建っていて、河岸の露天

風呂までは木造の長い階段を降りて行かねばならない。露天は混浴であり、長い階段を下るにつれ、様々な期待が膨らむ。



露天風呂の上には時代がかった立派な木造の楼閣が浮かんでいて幻想的なイメージ。力のある湯が身を包み、川風が頬にやさしい。

*

その雰囲気の中では古き良き時代のまま、時がじっと動かないように見える。

こちらも、じっと動かずに温泉美人の登場を待ってみたが、だれも来ない。ただ川の音だけが流れゆく時の存在を感じさせる。

時を忘れていつも以上に長湯し、高濃度の温泉成分により、心身ともにリフレッシュすることができた。

*

最近は掘削技術が進化したおかげで、古くからの温泉だけでなく、手軽に行ける近場の温泉も増えている。

アクセスが良くきれいな施設も便利だが、現実逃避には、伝統ある温泉地が最適だと感じる。

今回訪れた塩ノ湯温泉は、気持ちが安らぎ、やさしくなる本当に素晴らしい温泉であった。

あまたの文人が愛でてきた自然の中に身を置いている太古の雰囲気を味わいたい方にはおすすめの温泉である。一度訪れてみてはいかが？

あれ これ わが職場

毎日1万歩に挑戦

熊本日日新聞社 印刷局技術管理部長 山下 修

私は鉛を知らない世代で、求人票には「オフセット印刷工」とありました。早いもので入社32年目になりました。入社して最初の仕事は給紙担当で、巻取りの入庫、切替え、装着、ペースタ―準備作業など「全てが手作業」の時代でした。当時の輪転機は断紙も頻発。損紙率も非常に高く、刷了後には大量の黒損を処理しながら輪転機のことを「黒損製造機」と陰口を叩いたものです。現在は輪転機の改良も進み、省力化・自動化機器の導入に加え、損紙対策にも力を入れたお蔭で、損紙率も大幅に減少。安定稼働が当たり前の時代になりました。当時とは雲泥の差で、輪転作業は随分楽になったと実感しています。

私は、一昨年からは輪転機更新計画に携わり、昨年3月に無事稼働できました。ほっとする間もなく、次は輪転機の延命対策の仕事が待っています。

話は変わりますが、夏に体調を崩し、暫らく休みました。「その体で何もないのはおかしい」と言われながらも、これまでは何とか元気に過ごしてきました。しかし、気が付けばとっくに50歳も超え、体重も増える一方。輪転機同様、自己延命に取り組むべき時期になったと実感しました。私が考えた延命策は、①毎日1万歩、②週1日の休肝日、③禁煙。の三本柱です。②・③はなんとか達成できそうですが、1万歩はなかなかの距離です。散歩で随分遠くまで歩いて、たったの数千歩。心が折れそうです。これから寒い冬になりますが、どこまで頑張れるか挑戦しようと思っています。

時に先人を思い出し

(株)日経首都圏印刷 千葉工場製作部長 小川 圭一

「電車から海が見えた」。かつて先輩に良く聞かされた話だが、この電車は東京から千葉を経て銚子に至る「総武線」のこと。殊に船橋から千葉にかけての海岸線は総武線から程近い国道14号と並行していて、埋め立てが進む前の東京湾が良く見えたようだ。

千葉工場(習志野市茜浜)は当時の海岸線から4キロメートル沖にあり、現在のウォーターフロントで、工場前の護岸には2重にテトラポットが入れられているが、荒天の時の波飛沫は目を見張るほど、東映映画のオープニングで有名な「荒磯に波」さながらの大迫力になる。そういう時は風に弱いことで有名な「京葉線」はストップし、帰宅の足がなくなることもある。

天気が良くなると内房に伸びる京葉工業地帯、台場越しに見える都心の高層ビル群、湾岸には羽田空港の管制塔などが遠望でき、夜になるとそれらの灯りが瞬きの連なりとなって、空には羽田空港のB、D滑走路へ降りる旅客機の光跡が続く。海岸線の光の列が切れる場所は、富津岬(房総半島)と観音崎(三浦半島)に挟まれた浦賀水道で、巨大な自動車運搬船をはじめとした様々な船の往来が望め、見飽きることがない。

疲れを感じたときは景色に目を向け気分転換も一興だが、わが工場の人たちはあまり景色を楽しむことがないようで共通の話題とならず残念。しかし、不興を嘆くよりも順風を喜び、時に先人の教えを思い出しながら不意に襲ってくる荒波に備えたい。

長期連載

新聞製作技術の軌跡

太平洋戦争終結までの新聞製作技術

その7 原稿・写真をどのようにして送ったか(戦前編)

今回は取材現場などから原稿や写真をどのようにして送ったかについて、手段別にたどってみる。

《郵便》

新聞の父でもあった前島密

江戸時代の飛脚便に代わる新式郵便の制度は1870年(明3)6月に前島密が政府に建議した。その直後に前島はイギリスに出張を命じられたので、新式郵便の具体的な準備は杉浦譲が行った。翌71年4月、東京・西京(京都)・大坂(大阪)の三都市に郵便役所と、東海道の沿道に62の郵便取扱所が置かれ、新式郵便が開始された。毎日1回休みなく、東京と大坂から72時間かけて郵便物を運んだ。

前島は71年8月に帰国した。12月には日誌(官報)と刷り上った新聞の取り扱いを始めた。新聞は書状(手紙)よりかなり低い料金で読者に郵送された。翌72年7月、北海道の一部を除く日本全国で待望の郵便事業がスタートした。驚くべき速さである。

イギリスに出張した前島は新聞の重要性を知り、新聞発行に乗り出した。協力者を得て72年(明5)6月に東京で郵便報知新聞(94年12月に報知新聞と改題)を創刊し、1円切手は前島密だ。木版刷りで毎月5回発行した。郵便報知は文字どおり郵便のネットワークをフルに利用して全国から記事を無料で集め(報知)、新聞を作った。

また73年(明6)7月から、新聞原稿は4匁(15グラム)までは無料とすることになった。生まれたばかりの新聞にとって、この2つの優遇策はどれほどありがたかったことであろうか。しかし前島の新聞優遇は大きな赤字をも



1円切手は前島密

たらし、批判もあった。そのため、新聞原稿の無料郵送は前島の退官に合わせたかのように、83年(明16)1月に廃止になった。前島密はよく郵便の父と言われているが、新聞の父でもあると思う。

72年3月、全国に先駆けて東京で府内郵便が始まった。郵便ポストに投函された手紙を集める集信、それを宛先に届ける配達の数日を1日に3回行った。便数は次第に増加した。そのため新聞社は急がない原稿の送稿は高価な電報でなく、郵便ですませることが多かった。しかし、電報・電話が普及するにつれて、原稿の送稿に郵便はほとんど使われなくなった。

《電報》

文明開化のシンボル

1869年(明2)12月、東京-横浜間で電気信号によって文字を符号化して送受信する電報のサービスが国の手で始まった。電報で使える文字はカナと数字のみ。使用した符号は短点(トン)と長点(ツー)を組み合わせた和文モールス符号である(当初は別方式)。電報は72年(明治5)の新橋-横浜間の鉄道開通と並んで、文明開化のシンボルであった。

明治政府は電信線の建設に力を入れ、72年には東京-神戸間が開通。73年にはそれが長崎まで延長され、長崎に陸揚げされていたデンマーク資本の大北電信会社の海底ケーブルと接続すると、シベリア経由でヨーロッパとつながるようになった。

80年(明13)頃には大都市間、90年頃には全国の県庁所在地が電報でつながったという。

電報によって初めて、情報を瞬時に遠くへ伝えることができるようになった。77年(明10)の西南戦争で政府軍が勝利した原因のひとつが電報であった。速報が身上の新聞は、急ぎの記事は高価ではあるが電報を利用して送った。そのため明治の新聞紙面には「電報」とか「東京電報」という欄を作り、読者に電報

を使ったニュースであることを知らせていた。電報は速くて便利であるがカナしか使えず、同音異義語の多い日本語の文章には不向きで、間違った記事も結構あったようだ。

帝国憲法の全文を電報で大阪へ

89年(明22)2月、帝国憲法が發布された。東京朝日は憲法の全文をカナ書きの電文に書き改め、難解な字句にはカナの注釈を付けて大阪に電報した。この日の大阪朝日宛の発信量は11回にわたって1,137発信(1発信は10字)だった。受信局では紙に記録されたモールス符号をカナに書いてゆくが、大変な作業だった。大阪朝日では注釈を参考にしながらカナ文を正文に直し、帝国憲法の号外を発行した。なおバックアップとして、憲法全文を持った社員が昼に新橋発の東海道線の列車に乗り静岡まで、静岡から特別仕立ての人力車で浜松へ、浜松から再び列車に乗り、翌日夜に大阪に到着した(長浜－大津間は汽船)。

電報が新聞・通信社の社名に

後述するように東京－大阪間に長距離電話が開通するのは99年だから、1901年(明34)には電報は速いというイメージがあったのだろう。同年7月に設立された通信社は電報通信社(電通)と命名された。また03年(明36)11月に東京で創刊された新聞は電報新聞(06年12月に大阪毎日が買収し、毎日電報となる)という題号であった。

新聞社に記事を配信する通信社は、明治末期から大正にかけて、帝国通信社(帝通、92年5月設立)と日本電報通信社(電通、06年10月に電報通信社を改組)の2通信社が記事配信にしのぎを削っていた。04年(明37)に起った日露戦争の頃、帝通の電報は料金節約のため略号を使って字数の減少を計った。これに対し電通は略号を使わず、そのまま打電した。その結果、戦況公報は帝通よりも10分ぐらい早く到着。しかも略号翻訳の手間が省けるので、福岡日日新聞(現在の西日本新聞)は帝通との契約を解除したという。

読者へ電報で速報

電報は新聞社への記事送信に使われただけではない。日露戦争の際、読売は本紙直接購読者を対象に、電報料読者負担で重大事件の速報を電報で伝える「電報通信」というサービスを行った。現在のインターネットによるニュース速報サービスの元祖と言えらるだろう。なお読売の社史によると、このサービスは戦争の号外競争で劣勢であったための窮余の策としている。日露戦争後にはこのサービスを行っていないようなので、利用者は多くなかったと思われるが、画期的な事業だ。

電報が多用されるにつれ、新聞社は電報料金が無視できなくなる。政府に何らかの働きかけがあったのだろう。04年(明37)に外国新聞電報制度、07年1月に内国新聞電報制度が実施され、一般電報より著しく電報料金が軽減された(約5分の2)。

新聞社での電報の利用は、電話が次第に普及するのに伴って役割を終え、外国電報だけになっていく。例えば大阪朝日では04年3月で「東京電報」は終わり、4月からは「東京電話」に変わった。

《電話》

予定数に満たなかった創業当初

電報のサービス開始に遅れること21年の1890年(明23)12月16日、東京、横浜、そして東京－横浜間で電話のサービスが正式に開始された。電話事業は民営か官営かで紆余曲折があったが、結局は官営で行われることになった。これには乞われて逋信次官に復帰した前島密によるところが多かったという。

創業当初は、電話の加入者は予定した数に満たなかったようだ。その年の12月31日現在の加入者数は東京179(他に公衆電話の電話所15)、横浜45だった。加入者には電話番号簿が配られたが、新聞・通信社が多く見える。新聞・通信社を含め、どこも電話は1台だけだった。創業時は通信連絡に電話より小僧さ

んを雇ったほうが安くて便利だという声もあった。新聞・通信社では1台だけの電話を送稿よりも営業に使ったようだ。

なお、東京、横浜の電話に先立ち、その前年の89年(明22)1月に東京-熱海間で電話の商用試験が始まった。同年2月の憲法発布の際、時事新報は憲法の全文を電話で熱海に送稿し、印刷して町民に配ったという。

大阪、神戸、そして大阪-神戸間で電話のサービスを開始したのは93年(明26)3月で、東京に遅れること2年ちょっとだ。

長距離電話の開通と速記者の採用

そしていよいよ99年(明32)2月に東京-大阪間で待望の長距離電話が開通した。これによって本格的に電話が記事の送稿に使われるようになる。

電話でゆっくりと記事を送稿していたのでは電話料金がかさむ。特に長距離電話ではなおさらだ。そこで時事新報は99年に速記者を採用した。これが速記者採用の始まりのようだ。以後、新聞・通信社は次々に速記者を採用し、明治の終わりには、全国に約120人の速記者が活躍していた。

電話が普及し便利さが分ると電話が1台では足りなくなる。たとえば、読売に2台目の電話が入ったのは13年あとの1903年(明36)12月のことである。

予約電話・専用線

電話が開通したとはいえ、当時は設備が貧弱で、必要な時にいつでも電話が利用できるわけではなかった。そこで1906年(明39)6月から始まった、普通通話の2倍の料金の至急電話を使わざるをえないこともあった。

07年9月からは予約新聞通話制度が実施された。これは毎日一定時間に2通話以上の長距離通話を行なう新聞・通信社の報道電話を、予約によって接続するもの。まず大阪朝日と東京朝日、大阪毎日と毎日電報、時事新報と大阪時事新報、大阪新報と同東京支局、電通と同大阪支局、帝通と同大阪支局の間で始ま

った。

さらに自由に長距離電話を使えるようになるため、専用電話線制度が23年(大12)に許可された。これは新聞・通信社が自費で電話線を敷設し、これを国(通信省)に献納するというもの。翌24年に朝日、毎日、電通(東京-福岡間)の専用線が開通した。時事は許可されたが途中で挫折、帝通は資金面で許可がなかったという。専用線の開通で初めて、いつでも自由に記事を送信することができるようになった。

《写真電送》

大正末から昭和に写真電送が実用化

1906年(明39)、フランスのベランなどが電話回線を通して遠隔地に写真を送ることに成功した。これが写真電送の始まりである。送信側の円筒に写真を巻き付けて光を当て、光電装置で写真の濃淡を電気信号に変える。受信側では電気信号を光に変換して円筒に巻いた感光紙・フィルムに焼き付ける。この方式のポイントは送信側と受信側の円筒の回転を正確に一致(同期)させることだ。そうでないと受信画像が歪む。

ベラン式は24年(大13)にパリ-リヨン間で実用化された。ドイツではシーメンス社がSKT式を実用化し、27年(昭2)からベルリン-ウィーン間で一般電送業務を開始した。

日本では28年(昭3)11月10日に京都で昭和天皇の即位の大典が行われることになった。新聞・通信各社はその報道準備に知恵を絞った。ちょうど色々な写真電送機が実用機に入った時期に当たった。朝日と電通はシーメンスのSKT式の写真電送機を、大阪毎日・東京日日はベラン式の写真電送機を購入した。

たとえば電通はSKT式の送信機2台、受信機7台の合計9台の写真電送機をドイツからシベリア鉄道経由で陸送し、どうにか大典に間に合わせた。送信機は東京と大阪、受信機は名古屋、京都、岡山、広島、福岡に設置。

大典期間中は大阪分の送信機を京都に仮設した。

東京日日は8月28日の夕刊に日本で最初の電送写真を紙面に掲載した。次いで10月16日、電通が加盟社に電送写真を配布。東京朝日は10月21日付の朝刊紙面で電送写真を掲載した。

代役のNE式が大活躍

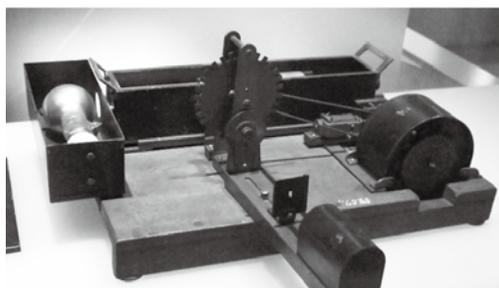
大阪毎日・東日のペラン式は同期の不調を起こすことがあった。また画質も良くなかった。これでは大典の速報のような大事なイベントに不安が残る。折も折、毎日日本電気の丹羽保次郎と部下の小林正次が独自技術でNE式写真電送機を開発したことを聞き、これを採用することにした。東京、大阪に送受信機1台ずつ、京都に送信機1台が納入されたのは大典直前の11月3日のことだった。

11月6日、皇居を出発するお召馬車の写真がNE式で大阪毎日に電送され、東京と大阪ではほぼ同時に発行された号外に掲載された。朝日の号外は毎日より2時間遅れ。SKT式は写真1枚を送るのに数十分かかった上に、使える写真も少なかったという。大典の期間中、毎日の電送写真はすべてNE式が使われた。NE式写真電送機は技術先進国のフランス、ドイツの舶来品をしのぎ、日本の技術の優秀さを世の中に知らしめた。

写真の電送は記事の送稿に比べて時間がかかる。また電話回線の品質が安定している必要がある。そのため専用の電話回線が望ましい。24年(大13)年、朝日、毎日、電通に専用電話線が開通した。写真電送のインフラがようやく準備されたところだったのである。

なお、写真電送で東北地方は冷遇されたようだ。秋田魁新報の写真は電通が京都から東京まで電送、東京から秋田までは列車便を使ったと社史は書いている。

朝日も電通もNE式の優秀さを認め、後にその写真電送機をシーメンス式からNE式に切り換えた。



NE式写真電送機（送信機の光学部）＝国立科学博物館

後のことだが、31年(昭6)に満州事変が起ったため、電通は翌32年に福岡に送信機を設置した。

無線で五輪の写真を電送

日本電気は無線での写真電送を研究し、29年(昭4)には東京－栗橋間で成功した。それから伊東、大阪、台北と電送の距離を延ばした。そして36年(昭11)8月のベルリンオリンピックで写真を無線電送した。キャビネ判1枚がわずか15分から20分でベルリンから送られてきた。最初は朝日がベルリン－上海間を無線電送し、上海からは空輸の計画だったが、最終的に日独政府の試験電送という形になり、新聞・通信社が参加した。ベルリン郊外の中央電信所からの電波を小室受信所(埼玉県)で受け、東京中央電信試験室に中継し、NE式受信機で受像するもの。電波状態が悪く、大幅な写真修整が必要な写真もあった。

36年(昭11)6月、朝日は日本電気と共同で本社に据え置くのではなく、携帯型の写真電送機を開発した。携帯型(朝日の愛称は豆電)といっても全重量は64キロもあり、運搬するのにひと苦労だった。それでも持ち運びができる電送機はありがたかった。戦前の国産の写真電送機は日本電気製のみであった。

《伝書鳩》

八王子の大火で活躍

カワラバトを飼い慣らし、その帰巢本能を利用して遠隔地の通信手段とする伝書鳩の歴史は古く、紀元前に遡る。数百キロの距離か

ら巣に戻り、時速は50キロを越すこともある。

1893年(明26)1月、東京朝日は陸軍の通信用鳩に着目し、伝書鳩を飼い始めた。しばしば放鳩試験をしていたが、初めて通信用に使用したのは95年(明28)6月、品川駅からの原稿だった。翌日の紙面にはわざわざ伝書鳩を使ったことを書き添えている。これが新聞界で初めての伝書鳩の実用化だ。短距離なのでテスト的に使用したのだろう。

97年(明30)4月、東京・八王子で大火が発生した。その惨状を速報するため、探訪員(取材者)は伝書鳩3羽を連れて現地入り。原稿を細い管に入れ、鳩の脚に結び付け空に放したという。伝書鳩を使った速報の第1号だ。

しかし、その後、東京朝日は伝書鳩の使用を中断。またそれ以外の新聞社で伝書鳩を導入する動きはなかった。電話網が次第に充実してきたからだろう。

1922年(大11)7月、皇太子だった後の昭和天皇が富士山に登山。各社のカメラマンは陸軍から鳩を借り、五合目の山小屋前で撮影したフィルムを背負わせた。鳩は東京・中野の鳩舎に無事戻り、待ち構えた記者がそのフィルムをそれぞれの本社に持ち帰った。これが鳩による写真輸送の始まりだという。当時のフィルムは大きく、運ぶ鳩も大変だったろう。

23年(大12)9月に関東大震災が発生した。交通機関、通信機関が全滅する中で、陸軍の軍用鳩が大活躍したという。これ以降伝書鳩を導入する新聞社が増えた。24年5月に東京日日が軍からの払い下げの鳩などで伝書鳩を始めた。時事新報、報知新聞も同じ24年に、東京朝日は25年に導入。電通は28年(昭3)に社屋に鳩舎を設置した。

地方紙でも多くが伝書鳩を導入した。たとえば信濃毎日には陸軍から鳩を譲り受け、北アルプスでの遭難事故などの際、伝書鳩は現場から松本支局までの記事・写真の輸送に大活躍したという。新聞社の社史の大部分に伝書鳩の活躍が記述されている。



原稿を背負った伝書鳩(信濃毎日新聞)

《飛行機》

飛行大会に熱狂

ライト兄弟が世界で初めて本格的な有人動力飛行を行ったのは1903年(明36)。日本では10年(明43)12月に東京・代々木の練兵場で徳川大尉と日野大尉の飛行機が初めて空を飛んだ。この頃の飛行機は余り信頼性がなく、見世物としての性格が大きかった。海外からは外国人飛行家が数多く来日し、飛行大会を行った。飛行大会には見物人が多く集まり、新聞は紙面で大きく扱った。我が国最初の飛行大会は11年(明44)3月に大阪朝日が大阪の城東練兵場で行った。何と50万人の観衆が集まったという。その後も各地で新聞社による飛行大会が開催された。

大正時代に飛行機が実用化

大正時代に入ると飛行機の信頼性が上り、長距離の輸送で利用されるようになった。23年(大12)1月、朝日を母体とする東西定期航空会が郵便・荷物輸送を開始した。東京は洲崎飛行場、大阪は城東練兵場を基地とし、浜松で輸送品を交換して帰る。

23年9月、関東大震災が発生。東京朝日の洲崎格納庫と4機が焼失する大打撃を受けた。

24年(大13)1月の当時の皇太子(昭和天皇)の婚礼はまだ写真電送が始まる前で、大阪への写真は空輸されることになった。朝日機と毎日のチャーター機は相次いで代々木練兵場を離陸。悪天候で奈良県(朝日)や三重県(毎日)に不時着。そこからは車でフィルムを運び、写真号外が発行された。

続々航空部が誕生

常に朝日とライバル関係にある毎日は24年（大正13）の3月、新聞社で初めて航空課を設置し、飛行機の自社運航に踏み切った。すると今度は朝日が26年7月、東西定期航空事業とは別に航空部を新設した。

朝日・毎日以外にもイベント、取材、写真輸送などのために航空部や航空課を設け、飛行機を導入する新聞・通信社が次々に出てくる。報知新聞はいつ航空部を新設したか不明だが、早くも24年（大13）11月、報知1号機が所沢から伊勢方面へ初飛行したという。

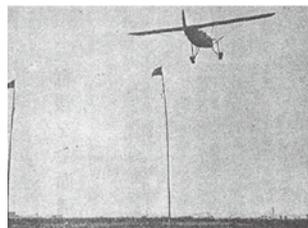
読売は朝日、毎日と比べると航空の面ではかなり遅れていた。自力で飛行機をかかえる余裕はなく、チャーター機を使用した。31年6月には電通と共同で飛行機を使ったが、その主体は電通側にあった。自前の飛行機が入ったのは32年（昭7）5月、正式に航空部が設けられたのは38年8月のことだ。

北海タイムス（北海道新聞の前身の一つ）は27年（昭2）に札幌に専属飛行場を建設し、飛行機を飛ばした。河北新報では36年（昭11）4月に航空課が誕生した。8月に行われたベルリンオリンピックでは東京で受信した開会式の写真は、河北機で仙台に空輸され写真号外が発行された。この時、北海タイムスの飛行機と洲崎から仙台までデッドヒートを演じたこと社史は書いている（河北機がわずかに早かった）。

中日新聞の前身の一つ、新愛知は27年（昭2）1月、航空部を新設。もう一つの名古屋新聞も同年2月、飛行機1機で航空活動を開始した。中国新聞は36年5月、航空部を新設。宮島飛行場を基地にし、水上機を使用した。高知新聞は33年4月、航空部を新設し、やはり水上機を使用した。

電通の航空部は26年12月に新設された。基地は東京郊外の立川に置かれ、1機でスタートした。28年11月の昭和天皇の即位の大典に備えて3機が増強された。

飛行機が着陸して原稿を受け取ることができない場合は、二本のポールを立て、その中間に原稿の包みをぶら下げ、飛行機が低空飛行で吊り上げることもあった。



飛行機による原稿の吊り上げ（日本電報通信社）

満州事変で原稿輸送に大活躍

飛行機は高速ではあるが、現場から最寄りの飛行場へ、到着した飛行場から新聞社への時間がかかり、記事の電話送稿や写真電送にかなわない。飛行機が原稿輸送で活躍するのは満州事変が始まってからだ。海の向うの戦争では電話が使えない場合が多く、記事や写真の内地への輸送に多くの飛行機が使われた。

戦争の激化に従って新聞社の飛行士が軍に徴用されることも多くなり、河北や高知などの航空活動は自然消滅した。そして45年（昭20）8月に戦争に負けると、戦勝国から航空活動はすべて禁止され、新聞社で活躍した飛行機も破壊されてしまった。新聞社で使用された飛行機は延べで約200機という。

なお、付記したいのは、新聞航空で数多くの飛行士などが墜落などで亡くなっている。読者を熱狂させた号外の裏には、尊い犠牲があったことを忘れてはいけぬ。

【参考文献】

- みんなの郵便文化史（小林正義、2002年）
- 東京の電話・上（日本電電公社、1972年）
- 丹羽保次郎 人と業績（丹羽記念会、1978年）
- 伝書鳩 もうひとつのIT（黒岩比佐子、2000年）
- 新聞航空史（星山一男、1964年）

……
 次回は立花が戦後の活字サイズの変遷・活版工程の機械化について紹介します。

新マネージャーに就任して

大石 高廣

このたび日本新聞製作技術懇話会のマネージャーの後継のお話を頂きました。

1972年(昭和47年)日本経済新聞社に入社、以後ほとんどの時間を編集局整理部で過ごしていましたが、95年春に新聞制作の上工程に異動、99年から名古屋工場ですべて印刷業務に携わることになりました。

名古屋では3年間を移転前の古い工場、その後1年間を新工場で過ごしました。営業や技術関係の方々が、業界の動向、新しい技術、機器のトラブル、他社の動静などひとしきりお話ししてってくれたものでした。輪転機とその周辺機器、新聞用紙、インキ等々、私の新聞印刷に関する基礎知識はこの時に仕入れたものであります。新工場ではトラブルはほとんどなく、紙面品質もはるかに向上して、新しい技術や機械の有難味を実感した次第であります。

その後、環境は大きく変わって、新聞界は厳しい状況が続いています。「新聞社と一体となり、新聞製作技術の改善、向上に資する」との理念のもと、CONPTは事業を続けてきました。これからもJANPS、CONPT-TOURを両輪に、技術懇談会や研修会など、新しい味付けのある活動を追求していくものと思います。

CONPT-TOURについては、マネージャー就任前の業務引き継ぎということで、6月に実施するdrupa視察の準備過程に立ち会い、関係者の綿密な連携プレーを見ることができました。また、事務局にある会報などの資料を拝見して、懇話会の活動に携わった先輩方の尽力には頭の下がる思いがしました。

マネージャーの役割は会員各社の親睦、情報交換、新聞各社とのパイプ役等々、会の円滑な運営にあると思っておりますが、前任マネージャーの皆様と比べると、経験識見とも

及ぶべくもありません。皆様のご指導ご鞭撻を切にお願い申し上げます。

マネージャー退任のご挨拶

徳永 正裕

昨年12月いっばいで懇話会事務局マネージャーを退任しました。5月の年次総会で交代するのが本来ですが、この1月で70歳になるのを潮時に退こうと決めました。酒井寛マネージャーの後を受け10年5月から5年半の在勤になりますが、正直こんなに長くなるとは意想外でした。現役時代にCONPT-TOURに参加したこともなく、JANPSも新聞社関係の参加がない時代で、懇話会に対しては多少他人事めいていたというのが偽ざるところです。

懇話会に来てみると、リーマンショック後の新聞社の部数減・広告収入減、新規投資停止の影響は、会員社のみならず上、中、下流の製作技術業界に広く深く及んでいる実状を直視しました。10年当時45社あった会員社数は、新規入会も数社あったとはいえ、昨年末現在41社となっていました。会員は上坂義明新会長の“積極的勧誘主義”により、戻し基調にありますので40社を割り込まないようにと願うばかりです。

JANPSもCONPT-TOURも懇話会が隆盛であってこそ成功するイベントと言えます。JANPSは今後新聞社と一層連携を図り、製作業界のみならず新聞界全体を盛り上げる方向が模索されております。また、TOURの大きな利点の一つは新聞社と業界の参加者が、数日間寝食を共にして知己になることです。これはなにものにも代えがたい参加者の財産です。新年合同名刺交換会を含めた3大イベントのほか、新しい魅力を懇話会に付け加えることが今必要だと考えます。懇話会は昨年不惑の40歳を迎えました。経年劣化した部分がないとは言えません。課題をあれこれ言う

だけ言って辞めるのかとお叱りを受けそうですが、上坂新会長・大石新マネージャーの下で懇話会42歳の改革に着手する機会が来たのではないかと思います。

それはさておき、この5年半本当にお世話になりました。新聞協会、見学を受け入れてくださった各新聞社、そして懇話会会員社の皆様様に心からお礼を申し上げます。

▶ 第41回年末全体会議開く

CONPTの2015年度の活動を中間報告する第41回年末全体会議を、12月11日(金)午後4時から日本プレスセンター内で開いた。日本新聞協会から3人の来賓を迎え、会員社31社34人が出席した。

上坂義明会長は冒頭の挨拶で、JANPSやCONPT-TOURを振り返り「全体的にはうまくいった」として、「来年は新聞業界の活性化、新しい事業に役立てることのできる活動に取り組んでいく」と決意を語った。来賓の三宅直人日本新聞協会技術委員長(毎日)は「新しいアイデアがビジネスにつながるよう、手を携えて進んでいきたい」と述べ、神田俊英同編集制作部長は「JANPSについて来年早々から話し合いを始め、知恵を出し合って活気あるものにしたい」として、共にCONPTとの連携を語った。

続いて、キャノンプロダクションプリンティングシステムズ(代表：作田勉取締役常務執行役員、担当者：宮腰直樹第一営業本部販売推進部販売推進課チーフ)の入会と、明和ゴム工業の担当者が阿部高廣営業本部新聞担当課長に変更になったことが紹介された。

評議員会(藤間修一副会長)、クラブ委員会(平井泰之委員長)、企画委員会(矢森仁委員長、村松哲JANPSコーディネーター)、広報委員会(桑江暢也委員長)がそれぞれ報告の後、議事に入り、平成28年度の事業計画、役員体制、委員会担務・メンバーの見直し、懇

話会会則などの一部改訂の4議案が了承された。

事業計画では6月にdrupa視察のCONPT-TOUR2016、10月にWPE視察団を派遣する。役員体制では、都並清史氏が評議員に再任された。諸規定改定では、新規会員勧誘のため、1年間限定で入会金を半額にするとともに、設備負担金をなくすことなどが盛り込まれている。

3氏 感謝の集い

芝前会長、徳永さん、木村さん長い間ありがとうございました——。

年末全体会議後の恒例の懇親会は「芝則之氏、徳永正裕氏、木村禮氏への感謝の集い」の場にもなった。芝氏はCONPT会長を12年間務め、5月の定時総会で退任された。徳永氏は事務局マネージャーを5年7ヶ月、木村氏はCONPT-TOURコーディネーターを22年間務め、両氏とも今回の年末全体会議をもって退任された。

開会の挨拶で上坂会長は、永年の尽力に感謝の意を表すとともに、「これからもCONPTを力強いものするためのアドバイスを」と述べ3氏の健勝を願って杯を上げた。この日の参加者は会員社29社36人に会友、来賓も加わり49人。在職中の思い出や30年、40年にわたる交遊をめぐり歓談が続いた。

3氏はそれぞれ感謝の言葉を受け、記念品を贈られた後、芝氏が「会員各社はじめ皆様の尽力で新聞界に役立つことができたと思う。これからも貢献をお願いしたい」と謝辞。続いて「皆さんのお役に立てたか、会長のサポートはできたか、と心がけてきた」と徳永氏。木村氏は「これまでいい旅をしてきたと思っている。一層のご発展を」と結んだ。矢森仁企画委員長の惜別の思いを込めた中締めで、1時間半余りの会はお開きとなった。

(事務局)

日本新聞製作技術懇話会 会員名簿 (41社) 平成28年1月1日現在

社名	〒番号	所在地	連絡先
株インテック	136-8637	東京都江東区新砂1-3-3	03-5665-5097
NECエンジニアリング株	270-1198	千葉県我孫子市日の出1131	04-7185-7722
株加貫ローラ製作所	544-0005	大阪府大阪市生野区中川5-3-13	06-6751-1121
キャノンプロダクションプリンティングシステムズ株	108-0075	東京都港区港南2-13-29 キャノン港南ビル	03-6719-9701
株KKS	555-0011	大阪府大阪市西淀川区竹島4-11-54	06-6471-7771
株金陽社	136-0082	東京都江東区新木場1-1-1王子木材緑化ビル1F	03-3522-3600
クォード・テック・インク日本支店	336-0034	埼玉県さいたま市南区内谷3-11-26	048-839-8831
コニカミノルタビジネスソリューションズ株	105-0023	東京都港区芝浦1-1-1浜松町ビルディング	03-6311-9061
コダック(同)	140-0002	東京都品川区東品川4-10-13KDX東品川ビル	03-6837-7285
株ゴス グラフィック システムズ ジャパン	350-1328	埼玉県狭山市広瀬台2-5-15	04-2954-1141
サカタインクス株	112-0004	東京都文京区後楽1-4-25 日教販ビル	03-5689-6666
清水製作株	108-0023	東京都港区芝浦3-17-10	03-3451-1261
ストラパック株	221-0864	神奈川県横浜市神奈川区菅田町2800	045-475-7229
西研グラフィックス株	110-0016	東京都台東区台東4-29-15 上野永谷タウンプラザ213	03-5812-3681
第一工業株	335-0002	埼玉県蕨市塚越7-2-8	048-441-3660
DICグラフィックス株	103-8233	東京都中央区日本橋3-7-20 ディーアイシービル	03-6733-5067
田中電気株	101-0021	東京都千代田区外神田1-15-13	03-3253-2816
椿本興業株	108-8222	東京都港区港南2-16-2 太陽生命品川ビル30階	03-6718-0151
株椿本チエイン	108-0075	東京都港区港南2-16-2 太陽生命品川ビル17階	03-6703-8402
東京インキ株	114-0002	東京都北区王子1-12-4 TIC王子ビル	03-5902-7625
株東京機械製作所	108-8375	東京都港区芝5-26-24	03-3451-8172
株東芝インダストリアルICTソリューション社	212-8585	神奈川県川崎市幸区堀川町7234 スマートコミュニティーセンター15階	044-331-1097
東洋インキ株	104-8378	東京都中央区京橋2-7-19 京橋イーストビル8・9F	03-3272-0721
東洋電機株	480-0393	愛知県春日井市神屋町字引沢1-39	0568-88-6401
東和電気工業株	104-0032	東京都中央区八丁堀1-7-7 長井ビル6F	03-6222-5005
ニッカ株	174-8642	東京都板橋区前野町2-14-2	03-3558-7861
日本アイ・ビー・エム株	103-0015	東京都中央区日本橋箱崎町19-21	03-6667-1111
日本アグファ・ゲバルト株	141-0032	東京都品川区大崎1-6-1 大崎ニューシティビル1号館5階	03-6420-2010
日本新聞インキ株	108-0075	東京都港区港南1-8-27	03-3450-5811
日本電気株	108-8001	東京都港区芝5-7-1 NEC本社ビル	03-3798-4666
日本ボールドウィン株	108-0023	東京都港区芝浦4-9-25 芝浦スクエアビル11階	03-5418-6121
パナソニックシステムネットワークス株	224-8539	神奈川県横浜市都筑区佐江戸町600番地	045-938-1613
株日立製作所	140-8573	東京都品川区南大井6-26-3	03-5471-2141
富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ株	106-0031	東京都港区西麻布2-26-30富士フイルム西麻布ビル	03-6419-0421
富士通株	105-7123	東京都港区東新橋1-5-2 汐留シティセンター	03-6252-2625
富士薬品工業株	176-0012	東京都練馬区豊玉北3-14-10	03-3557-6201
方正株	112-0004	東京都文京区後楽2-3-19 住友不動産飯田橋ビル4号館8F	03-5803-6600
三菱重工印刷紙工機械株	729-0343	広島県三原市糸崎南1-1-1	0848-67-2068
三菱製紙株	130-0026	東京都墨田区両国2-10-14両国シティコア	03-5600-1475
ミューラー・マルチニージャパン株	174-0042	東京都板橋区東坂下2-5-14	03-3558-3131
明和ゴム工業株	146-0092	東京都大田区下丸子2-27-20	03-3759-4621

CONPT